

資料

基礎看護学実習における看護倫理教育に関する文献検討

A Literature Review of Nursing Ethics Education Regarding Clinical Practice in Fundamentals of Nursing

田丸 朋子¹⁾中山 由美¹⁾

Tomoko Tamaru

Yumi Nakayama

キーワード：倫理、教育、基礎看護学実習

Key words : ethics, education, clinical practice in fundamentals of nursing, nursing ethics

要旨

本研究では、基礎看護学実習における看護倫理教育の現状について、文献検討を通して明らかにした。10件の対象文献を、対象者、研究方法、看護倫理教育の方法、学生が感じとった倫理場面、倫理的な学習を支援する視点について表にまとめた。また、学習を支援する視点については、内容の類似性に基づいてカテゴリー化した。結果、いずれの文献も基礎看護学実習自体が倫理教育の場であると捉えていた。学生への倫理的な学習を支援する視点については、【振り返りや言語化】【解決する力の育成】【学生の倫理学習レベルに合わせた教育】の3つのカテゴリーが抽出された。学生は基礎看護学実習で倫理的問題を感じるケースが多くみられ、【振り返りや言語化】【解決する力の育成】が重要である。実習前に看護倫理の視点に触れ、実習後に学生が感じた倫理的問題を振り返り、考察する教育的支援が必要であることが推察された。

I. はじめに

医療技術が日々進歩する現在、療養の場は病院から地域へと広がりを見せている。それに伴い、看護師の活躍の場はさまざまに変化し、求められる知識や技術も幅広くなっている。看護の対象となる人の範囲が広がりを見せていることから、看護師には特にアセスメントや判断能力に加え、倫理的感受性を豊かにすることが求められている。「倫理的感受性」とは、「倫理的状況への遭遇体験に反応して感情が表れる主観的性質を持ち、倫理的問題への気づき、問題の明確な理解、問題に立ち向かうとすることを総合した能力であり、対象者を中心とする医療者の役割への責任感が反映する」と青柳（2016）が定義している。日本看護

協会の「看護職の倫理綱領」でも、前文に「（看護職は）人々の生涯にわたり健康な生活の実現に貢献することを使命としている」と明記されており、看護職としての倫理観の育成の重要性を記載している（日本看護協会、2021）。

看護師の倫理観の育成には、看護基礎教育の段階から、学生が倫理的な視点を持てるように教育していく取り組みが重要である。2022年度のカリキュラム改正においても、看護師に求められる実践能力と卒業時の到達目標や、看護師教育の基本的考え方等、多くの個所で「看護倫理」の部分が追加・修正（厚生労働省、2019）され、看護教育における倫理教育の位置づけがさらに重要視されるようになった。現行の看護学生の倫理教育とし

1) 梅花女子大学 Baika Women's University

では、科目として「倫理」や「看護倫理」を必修科目として実施している学校も多い中で、「看護学概論」等、低学年時に受講する科目の中で取り扱う場合も多い（山本・鷲尾・入部、2015）。

学生は、それらの科目で看護倫理の知識を身に付けていく一方で、看護学実習においては倫理的な行動が取れることが求められ、倫理的場面について考える機会が多い。特に基礎看護学実習は、学生が初めて臨地実習であり、病院や患者、看護職のリアリティを目の当たりにし、思い描いていた臨床現場との違いに気づく機会となっている。しかし、初学者であることから、患者の倫理的葛藤や看護師の倫理的な行動など、そこに倫理的問題があったとしても自己では気づけない学生も多いと考えられる。このことから、基礎看護学実習における看護倫理教育は特に重要であると言える。指導の機会についても、学生が倫理的問題を効果的に捉えられるように実習前から知識を定着させ、実習中だけでなく実習後においても、学生が捉えかけている倫理的問題について共に考え、その問題に気付く視点を養っていけるような教育が必要であると考えられる。

そこで本研究では、基礎看護学実習における教育について、現在どのように看護倫理教育に視点を置いた指導がなされているのかについてを、先行文献から明らかにすることとした。文献検討を通して現状と課題を明らかにすることで、今後の基礎看護学実習における看護倫理教育の充実につなげることができると考えられる。

II. 研究目的

基礎看護学実習における看護倫理教育として、倫理または看護倫理の科目および基礎看護学実習オリエンテーションを含めた看護倫理に関する教育・指導の現状について、文献検討を通して明らかにする。

III. 研究方法

1. 対象文献の抽出

文献データベースとして医学中央雑誌（医中誌

web）を用いた。対象文献は2000年から2020年のうち、基礎看護学実習と倫理について考察されている文献とした。キーワードを「基礎看護学実習」「倫理」とした。会議録を除き、論文に限定し検索を実施した（2021年2月実施）。抽出された24件の文献の抄録および内容を確認し、倫理と関係がない、もしくは基礎看護学実習を対象としていない文献14件を除外した。結果、10件の文献を本研究の対象とした。

2. 分析方法

ガラードのマトリックス方式（阿部、2012）を参考に、「題名・筆頭著者名（発行年）」「研究目的」「対象者・研究方法」および看護倫理教育の現状として「看護倫理教育の方法」「学生が感じとった倫理場面」「倫理的な学習を支援する視点」を列トピックとし、研究者らで文献内容を検討した。これらに関する記述を文献の中から抽出し、表にまとめた（表1）。また、倫理的な学習を支援する視点については、文献内容を詳細に読み込み、効果と課題についての内容の類似性に基づいてまとめた（表2）。

IV. 結果

1. 看護倫理教育の方法について

基礎看護学実習における看護倫理教育の方法について、すべての文献が「基礎看護学実習」自体が教育の場としていた。「（臨地実習は）人権・看護倫理の体験的学習の機会」（高田・新井・井村・作田・坂口、2009）、「臨地実習は、学生の倫理教育において重要な機会」（塚田・熊谷・江藤・三田、2020）等、基礎看護学実習に臨むことそれ自体が、学生にとって看護倫理教育を受ける場となっているとされていた。また、「実習初期の段階で倫理的な感受性と判断力を育むように支援している」（高橋・平瀬・野村、2011）のように、折り入って教育の機会を設けているわけではないが、通常の実習指導の場において、倫理的感受性を高める支援をしているものもあった。一方で、哲学や生命倫理、看護学概論という、1年次や2年時に担当さ

れている科目の中で倫理についての教育がなされていると記載されているものもあった(佐藤、2005;高橋ら、2011)。また、電子カルテによる個人情報保護に着目し、実習前に電子カルテ演習に取り組んだものもあった(奥平・石川・星野谷・斎藤、2018)。

研究の方法として、実習後にアンケート調査(5件)やインタビュー調査(1件)、倫理カンファレンスの内容分析(1件)を行っている文献もあった。しかし、それらはデータ収集を目的として行われているものであり、学生への教育として実施されているものではなかった。

2. 学生が感じとった倫理場面について

学生が基礎看護学実習中に感じ取った倫理場面については、学生が捉えた倫理問題やジレンマをダイレクトに聴取し研究したもの(栗本・太田・古城・金山・白神、2003;佐藤、2005;高橋ら、2011;塚田ら、2020)や、自由記載のアンケートや実習記録の記載内容から、学生が感じ取った倫理的問題や場面の内容を抽出したもの(高田ら、2009;竹下・佐久間・小澤・長谷川・木村、2010)があった。学生は、「看護について」などの医療・看護体制に関するジレンマや「食事」「睡眠」など、学生自身に関するジレンマを感じていたり(栗本ら 2003)、「人として尊重されない」「自分で意思決定できない」(高橋ら、2011)、「ベッドサイドに置かれたままの食事」「入浴援助後のドライヤー使用のタイミング」(塚田ら、2020)といった倫理的問題に気付いていたりしていた。また、「責任を持つこと」「人の役に立つこと」「人権尊重の姿勢」のサブカテゴリが抽出されていた(竹下ら、2010)。

また、道徳的感受性を測定する尺度である MST (Moral Sensitivity Test) やその後改定された MSQ (Moral Sensitivity Questionnaire) を用いた研究(竹村ら、2011;土井・吉田・山本・杉本・田沢、2016)の結果より、「広く患者の状態について理解していることは、専門職としての責任である」の項目が実習前に比べ実習後で有意に上昇(竹村ら、2011)していたり、「臨地実習中に倫理的葛

藤を感じた学生は 54.55%であった」という結果が記載されていた(土井ら、2016)。

3. 倫理的な学習を支援する視点

倫理的な学習を支援する視点として記載されていた内容を整理した結果、【倫理問題の振り返りや言語化】【倫理問題を解決する力の育成】【学生の倫理学習レベルに合わせた教育】の3つのカテゴリーに分類できた。【倫理問題の振り返りや言語化】については、「(学生が感じた看護ジレンマを)振り返り考えさせる」(栗本ら、2003)、「倫理問題についての言語化およびそれに関する思考を促すような教育的関わり」(佐藤、2005)、「(倫理的葛藤の)内容を言語化」(土井ら、2016)、「(実習の中での体験を通じて)その意味づけを促していくかわり」(内田・西岡・田村・森田、2010)といった記載のある文献が4件であった。次に、【倫理問題を解決する力の育成】については、「倫理的感受性を育成していく」(栗本ら、2003)、「多面的な視点から最善の選択をするというような考える力を育てていく」(高橋ら、2011)、「意味付けて解決できるような教育的環境を整える」(土井ら 2016)といった文献が3件であった。最後に、【学生の倫理学習レベルに合わせた教育】については、「学生自身に何が倫理原則なのかという基礎知識を持っていることが必要」(栗本ら、2003)、「まず、学生の倫理的判断の形成過程の段階を知ること」(塚田ら、2020)、「学生の倫理的発達課題に合わせた教育」(内田ら、2010)とした文献が3件であった。

V. 考察

1. 看護倫理教育の方法について

今回の文献レビューでは、すべての文献が基礎看護学実習を看護倫理教育の場として捉えていた。実習は学生が臨地に赴き、直接患者とかわることで様々な体験をする学びの場であり、コミュニケーション力の向上(本田・木村・青木・一柳、2020)や、看護技術実践の機会(竹内ら、2020)なども報告されている。

表 1 対象論文レビューマトリックス

題名・著者(発行年)	研究目的	対象者・研究方法	看護倫理教育の方法	学生が感じとった倫理場面	倫理的な学習を支援する視点
看護基礎教育における実習場面での看護ジレンマに関する予備的調査-基礎看護学実習 I を経験した学生の体験を通じて- 栗本一美ら(2003)	基礎看護学実習に臨んだ学生が、臨床の場面で感じた看護ジレンマにどのように対処したかを分析し、教育上の対応策を検討する	基礎実習 I を経験した学生のうち、看護ジレンマを感じた学生 10 名を対象に、基礎看護学実習終了後にインタビュー調査	基礎実習 I の実施	「看護について」「プライバシーについて」「病室環境・物品について」等、医療・看護体制に関するジレンマ、および「食事」「睡眠」「コミュニケーション障害」「心のケアの対応」「情報収集」「受け持ち患者以外の対応」等、学生自身に関するジレンマについての記載	・学生が感じた看護ジレンマはどんな内容だったのか振り返り考えさせる必要がある。そのためには、学生自身に何が倫理原則なのかという基礎知識を持っていることが必要となり、看護実践の場で「何が倫理的問題なのか」を感じることができる倫理的感受性を育成していくことが必要
看護学生が捉えた倫理問題-基礎看護学実習 I の体験の中で- 佐藤友美(2005)	基礎看護学実習の経験を通して、臨床実習で学生が捉える倫理問題はどのような内容であるのかを明らかにすること	基礎看護学実習を終了した 1 年生 59 人、2 年生 57 人に対し、基礎看護学実習終了後にアンケート調査	1 年生は哲学でドイツの生命倫理をめぐる問題の現状を、2 年生は看護学概論の中で専門職としての条件に免許制度・看護教育制度・倫理規定が必要であることを享受。1 年生は基礎実習 1、2 年生は基礎実習 II を実施	・【倫理的義務・責務に関する問題】 【倫理的権利に関する問題】 【倫理的忠誠に関する問題】が多く抽出された。	・学生が臨床実習の中で経験した倫理問題についての言語化及びそれに関する思考を促すような教育的関わりが重要
看護学生における「患者の人権・看護倫理の重要性」感得のプロセス-「基礎看護学実習 I」を通して- 高田直子ら(2009)	学生の実習における体験の振り返りから、患者の人権と看護の倫理について考える機会とした「基礎看護学実習 I」における学生の体験と学びのプロセスを明らかにする。	1 年生 60 名に対し、基礎看護学実習終了後のレポート記述を分析	基礎看護学実習 I の実施		
基礎看護学実習 II で学生が気づいた倫理的場面 高橋永子ら(2011)	基礎看護学実習 II 終了後の看護学生が基礎看護学実習中において「倫理的に問題がある」と気づいた場面から、学生の倫理的視点を明らかにする	基礎看護学実習 II を終了した 2 年次学生 61 名中、調査協力が得られた 51 名に対し、基礎看護学実習終了後に倫理場면을記載したレポートを分析	基礎看護学実習 I、コミュニケーション論、哲学、生命倫理、基礎看護学実習 II	・【人として尊重されない】 【自分で意思決定できない】 【看護師への気がね】 【患者不在のケア】 【個人情報保護が保たれない】 【患者の安全を阻害】 【学生の実習は患者に不利益】の 7 カテゴリーが抽出された。	・倫理の意味について多面的な視点から最善の選択をするというような考え方を育てるために事例討議、グループワークなどの教育方法の工夫が必要
早期体験実習としての基礎看護学実習 I の学び 竹下美恵子ら(2010)	早期体験学習としての基礎看護学実習 I 終了後の実習記録を分析し、学生の看護に対する考え方の傾向を明らかにする	看護短期大学 1 年生の学生 78 名に対し、基礎看護学実習終了後に提出された「実習のまとめ」の看護記録を分析	基礎看護学実習 I の実施	【看護の倫理的側面】というカテゴリが抽出され、サブカテゴリは「責任を持つこと」「人の役に立つこと」「人権尊重の姿勢」であった	
カリキュラム改正後の看護学生の倫理的感受性に関する実態調査(第一報) 竹村多加ら(2011)	基礎看護学実習 I 前後の Moral Sensitivity Test を分析し、学生の倫理的感受性に関する実態を明らかにする	看護専門学校の 1 年生 59 名に対し、基礎看護学実習の前後にアンケート調査	基礎看護学実習 I の実施	「広く患者の状態について理解していることは、専門職としての責任である」が実習後に有意に上がった。「原則的よりも感情的に患者に望ましいことを行おうと時々思う」「患者が処方された薬を内服しようとしないうちに、時々強制的に注射をしようという気持ちになる」が有意に下がった。「患者不在の意思決定場面」にしばしばは直面するも有意に低下した。	
基礎看護学実習後に行なった倫理カンファレンスの一考察 塚田みのりら(2020)	基礎看護学実習後の学生に倫理カンファレンスを行い、倫理的判断の形成過程の段階を知ることで、看護基礎教育における倫理教育への示唆を得ること	基礎看護学実習 II III を終了した 1 年次学生で同意の得られた 3 名に対し、実習終了後に倫理カンファレンスをもち、その内容を分析	基礎看護学実習 II III の実施	学生の違和感は「ベッドサイドに置かれたままの食事」「入浴援助後のドレイヤー使用のタイミング」「業務中の看護師の手洗い回数」等であった	・まず、学生の倫理的判断の形成過程の段階を知ること。そして、次のステップにつながる学習の場を作ることが、倫理的看護実践者の育成につながる
臨床実習における看護学生の道徳的感受性と倫理的葛藤-2 年生と 3 年生の看護学生を対象として-土井英子ら(2016)	基礎看護学実習を終了した学生と領域実習を半分終了した看護学生を対象に道徳的的感受性テストを用いて道徳的的感受性の傾向と臨床実習での倫理的葛藤経験の有無と相談の有無との関連を明らかにする	2 年生 60 名、3 年生 62 名に対し、基礎看護学実習終了後にアンケート調査	基礎看護学実習 II の実施、領域実習の実施	臨床実習中に倫理的葛藤を感じた学生は 54.55%であった(場面の記載はなし)	・適切な教育的対応ができるように教員と臨床指導者が連携しながら、学生が安心して相談できる教育環境を整えることが重要・倫理的葛藤を感じた時に相談することにより、その内容を言語化して指導者に伝え、意味づけで解決できるような教育的環境を整える
基礎看護学実習に向けた電子カルテ演習の試み 奥平寛奈ら(2018)	基礎看護学実習前に教育用電子カルテに模擬患者を設定し必要な情報を収集するという学内演習を実施し、基礎看護学実習前の準備教育としての有用性を検証する	基礎看護学実習開始前 1 か月の大学看護学科 2 年生 97 名に対し、演習及び基礎看護学実習終了後にアンケート調査	電子カルテ演習、基礎看護学実習の実施		・看護基礎教育の中で今まで以上に、個人情報保護に関する教育、取得した情報の保管や処理の仕方など医療情報にかかわる倫理についても併せて教育していく必要がある
基礎看護学実習 II において学生自身がとらえた医療従事者としての持つべき人間性についての自己像 内田史江ら(2010)	基礎看護学実習 II において学生自身がとらえた医療従事者としての持つべき人間性についての自己像を明らかにし、看護基礎教育に対する倫理学教授への示唆を得る	基礎看護学実習 II を終了した大学 2 年生 69 名に対し、基礎看護学実習終了後にアンケート実施	基礎看護学実習 II の実施		・学生は実践の医療現場に身を置くと自己の人間性・主体性を体験のなかから刺激された結果であるといえ、実習の中で体験を通じてその意味付けを促していくかわりが必要 ・学生の倫理的発達課題に合わせた教育への方向付けが必要

表2 【倫理的な学習を支援する視点】のカテゴリ分類

カテゴリ	コード
【倫理問題の振り返りや言語化】	(学生が感じた看護ジレンマを)振り返り考えさせる(栗本ら 2003)
	倫理問題についての言語化およびそれに関する思考を促すような教育的関わり(佐藤 2005)
	(倫理的葛藤の)内容を言語化(土井ら 2016)
	(実習の中での体験を通じて)その意味づけを促していくかわり(内田・西岡・田村・森田 2010)
【倫理問題を解決する力の育成】	倫理的感受性を育成していく(栗本ら 2003)
	多面的な視点から最善の選択をするというような考える力を育てていく(高橋ら 2011)
	意味付けて解決できるような教育的環境を整える(土井ら 2016)
【学生の倫理学習レベルに合わせた教育】	学生自身に何が倫理原則なのかという基礎知識を持っていることが必要(栗本ら 2003)
	まず学生の倫理的判断の形成過程の段階を知ること(塚田ら 2020)
	学生の倫理的発達課題に合わせた教育(内田ら 2010)

藤岡と屋宜(2004)は、「臨地実習は、学校で学んだことを適用してみるというような単純で平面的な学びではなく、立体的な学びである」とし、「学生は、現実に看護と治療を必要としている患者・家族に出会い、患者・家族の存在そのものに看護したいと動機づけられ、その存在の中に看護の知識と技術との結びつきを発見するという立体的な学びを臨地実習で体験する」としている。つまり、患者や家族に対して看護したいという気持ちが起こることで、看護職の倫理綱領の第3条「看護職は、対象となる人々との間に信頼関係を築き、その信頼関係に基づいて看護を提供する」といった行動に結びついて行動につながっていくと考えられる。こういった学びからも、基礎看護学実習自体が看護倫理教育の場であると捉えられると考えられる。

実習の場以外での看護倫理教育の機会として、電子カルテの演習があげられているケースや、哲学や看護学概論という別の科目で内容がとりあげられているというケースの記載があった。山本ら(2015)が行った基礎看護学実習の前後に開講されている看護倫理に関する科目の有無の実態調査によると、基礎実習前に行っている看護倫理教育としては、「看護学概論」などの専門科目で実施している学校が70%であった。看護学概論は、看護学生が最も初めに学習する看護学の科目で

ある。しかし、内容は「看護学全般における概論」であるがゆえに、基礎看護学実習を見据えた内容であるとは言えないと考えられる。文献には表れていないが、基礎看護学実習を実施する前には実習オリエンテーションを行う教育機関が大半であると考えられ、そのプログラムの1つとして看護倫理教育は含まれると考えられるが、今回レビューした文献では記載がみあたらなかった。

また、研究の取り組みとしてインタビューや倫理カンファレンスが行われていた。白木ら(2015)の調査では、小児看護学実習で倫理カンファレンスを行った学生の93%が、倫理カンファレンスを実施することで「看護倫理について学びを深めることができた」と回答している。学生に倫理的問題やその場面についての思いを口に出してもらうこと、またその問題点について共に考えること、というのは、学生の倫理的感受性を高める一助になると考えられることから、研究目的以外で上記のような教育の場を設けることも必要であると考えられる。

2. 学生が感じとった倫理場面

基礎看護学実習は、看護学生が初めて挑む臨地実習および初めて患者を受け持つ実習である。初学者であるからこそ、目にするもの・肌で感じるものすべてが学びとなると考えられる。その上で、

目にしたものがすべて正しいと認識してしまうのではなく、疑問やジレンマを感じ、倫理的問題に気付ける感受性を持つことは大切である。今回のレビューでは、複数の文献で学生の感じ取った倫理的問題や場面が提示されていた。内容が「臨床で看護師が行っていた看護に対する疑問」であったり、「まだ医療者ではない学生であるが故の葛藤」であったりと、幅広く倫理的問題に気付くことができている。看護倫理教育の場としての基礎看護学実習において、実際に倫理的問題に気付いたり葛藤を抱いたりするという現状が明らかとなったと言える。吉田(2013)は、「多くの看護師は、倫理綱領に沿った実践をしたくてもできないとき、できていない現場の状況にジレンマを感じる」としている。それは、学生にも同様に言えることであると考えられる。文献で取り上げられていた倫理的問題やジレンマは、看護師としての葛藤や学生特有のジレンマなど、内容は多岐にわたる。しかし、いずれも対象者がいる臨地実習であるからこそ感じとれる事象であると言える。

3. 倫理的な学習を支援する視点について

本研究では、学生の倫理的な学習を支援する視点として、【振り返りや言語化】【解決する力の育成】【学生の倫理学習レベルに合わせた教育】が必要であることが抽出された。

まず、【振り返りや言語化】についてだが、看護学生あるいは卒業後の看護師においても、常に「内省」や「振り返り」「リフレクション」が大切であると言われており、様々な研究が行われている。中村ら(2014)は、新人看護師へのリフレクションは、新人看護師自身の【行動の変容】や【看護師としての内面的変化】をもたらしていたとしており、新人看護師の教育支援のツールとして活用できるとしている。また、李ら(2016)は、振り返りの大切さに気づいた学生は、より高い看護実践能力の向上を目指して努力する内省が読み取れたとしている。これらのことから、看護の体験や学びを振り返り、内省することは、看護師の成長の糧となる行動であると言える。今回の文献

検討では、基礎看護学実習における倫理的問題への学習支援に着目した。倫理的諸問題を考えるために、理論・原理と道徳的判断・道徳感覚との間をフィードバックしながら、適切な均衡点を見つけていくという、「反省的均衡」という概念がある(高橋、2000)。この概念においても、倫理的な問題に出会ったとき、一般常識的にとらえられる道徳などと、自身の持つ感覚について、振り返り、考えることが大切であるとも言えることから、倫理的な感性の成長のためにも振り返りは重要であると言える。

次に、【解決する力の育成】についてである。基礎看護学実習で学生が看護問題に気づき、ジレンマを感じるケースが多いことが明らかとなったことから、その問題に気付けたことで終わりと思わず、解決し、次へつなげる支援をする必要がある。Davis(2011)は、個々の看護師が倫理的に問題のある状況をきちんとした倫理的問題意識を持った目でとらえることができることを、倫理的能力であると述べている。このような倫理的能力や問題解決力は、医師や看護師に求められる力であるが、組織的な取り組みの状況や病院での看護倫理教育の在り方等が影響しているともいわれている(水澤、2008)。そのため、学生の間からその能力を向上させる関わりを意識することは、看護基礎教育において意義のあることであると考えられる。

【学生の倫理学習レベルに合わせた教育】については、学生、特に基礎看護学実習に臨む学生は初学者であることから、倫理的感受性も学習レベルも様々であり、未熟である。坪倉(2005)は、ギリガンの「ケア意識の発達モデル」を活用し、看護の倫理的な能力が強化されるということは、ギリガンの言う第3段階に至ったことを示すとしている。ギリガンの第3段階とは、「個人の生存を確認するために、『自己をケアすること』に焦点があてられる」第1段階からステップアップし、「自分自身の自己中心性が批判され、『責任』の概念が登場する」とされる第2段階を経て、「ケアが自主的に選ばれた『判断の原理』になる」段階である

としている。学生が看護師となり、臨床で看護ケアを展開するときには第3段階にあるように関わること考えると、看護学生が第1段階にあるのか、それとも第2段階へのステップを登り始めているのかを見極め、適切にかかわる必要があると言える。

今回の文献検討で明らかとなった、【振り返りや言語化】【解決する力の育成】【学生の倫理学習レベルに合わせた教育】のつながりについては、まず学生の倫理学習レベルを把握することで、学生のレディネスを確認し、学生に応じた方法で振り返りや言語化を促す必要がある。その関わりを通して学生が感じている倫理的問題における問題点や自己の課題を明確にすることができると言える。この関わりを繰り返していくことで、学生は自らの倫理観を確認し、考える力を身につけ、倫理的能力を向上させることにつながると考えられる。

VI. 本研究の限界と課題

本研究では国内の文献のみを対象としており、海外の動向を反映できていない。加えて、基礎看護学実習に限定したためか、対象となった文献が少なかった。今後は、看護学概論や看護倫理など、基礎看護学実習の前に開講される科目も対象に入れるなど、看護倫理教育の範囲を広げて検討が必要であると言える。また、海外における看護倫理教育の動向についても検討が必要である。

VII. 結論

基礎看護学実習前後における看護倫理教育の現状について、文献検討を行った結果、以下のことが明らかとなった。

- 1) 基礎看護学実習において、いずれの文献も基礎看護学実習自体が倫理教育の場となることを認識していた。また、研究目的ではあるが、インタビューや倫理カンファレンスの実施など、学生に倫理問題について語らせる取り組みを実施しているものもあった。
- 2) 学生は基礎看護学実習において、様々な倫理問

題やジレンマを感じていた。

- 3) 学生への倫理的な学習を支援する視点については、【振り返りや言語化】【解決する力の育成】【学生の倫理学習レベルに合わせた教育】が必要であることが示唆された。

本研究における利益相反は存在しない。また、本研究の一部を第41回日本看護科学学会学術集会にて発表した。

文献

- Davis, Anne J. (八尋道子, 小西恵美子訳) (2011). 看護倫理の基本を考える－看護における倫理, 意思決定の枠組み, 看護師の倫理的能力－. 日本看護倫理学会誌, 3(1), 3-10.
- 土井英子, 吉田美穂, 山本智恵子, 杉本幸枝, 田澤茉莉奈 (2016). 臨地実習における看護学生の道徳的感受性と倫理的葛藤 2年生と3年生の看護学生を対象として. 新見公立大学紀要, 37, 1-6.
- 藤岡完治, 屋宜譜美子 (2004). 看護教員と臨地実習指導者, 東京: 医学書院.
- Garrard, Judith (2010/2012) 阿部陽子(訳), 看護研究のための文献レビューマトリクス方式. 東京: 医学書院.
- 本田優子, 木村幸代, 青木涼子, 一柳理絵 (2020). 授業と実習を通じた看護学生のコミュニケーション能力の縦断的变化とその背景要因. 創価大学看護学部紀要, 5, 5-17.
- 栗本一美, 太田浩子, 古城幸子, 金山時恵, 白神佐知子 (2003). 看護基礎教育における実習場面での看護ジレンマに関する予備的調査－基礎看護学実習 I を経験した学生の体験を通じて－. 日本看護学会論文集 (看護教育), 34, 44-46.
- 水澤久恵 (2008). 病棟看護師が看護実践の中で経験する倫理的問題と対応の実態及び関連要因の検討. 看護研究交流センター年報, 19, 39-46.
- 中村美保子, 東サトエ, 津田紀子 (2014). 新人看

- 護師のリフレクションが専門職者としての成長に与える意味について. 南九州看護研究誌, 12(1), 21-32.
- 日本看護協会(2021). 看護職の倫理綱領. 東京: サンケイ総合印刷株式会社.
- 奥平寛奈, 石川徹, 星野谷優子, 斎藤恵一(2018). 基礎看護学実習に向けた電子カルテ演習の試み. 日本シミュレーション医療教育学会雑誌, 6, 60-63.
- 李慧瑛, 深田あきみ, 新橋澄子, 横山美江, 橋本智美, 下高原理恵, 西本大策, 緒方重光(2016). 臨地実習における看護学生の内省傾向 ポートフォリオ導入後の成長報告書の内容分析から. 看護科学研究, 14(2), 20-31.
- 佐藤友美(2005). 看護学生が捉えた倫理問題—基礎看護学実習の体験の中で. 日本看護科学学会誌, 25(3), 92-95.
- 白木裕子, 松澤明美, 津田茂子(2015). 小児看護学実習における倫理カンファレンスについての学生の主観的評価. 日本小児看護学会誌, 24(2), 58-64.
- 高田直子, 新井龍, 井村香積, 作田裕美, 坂口桃子(2009). 看護学生における「患者の人権・看護倫理の重要性」感得のプロセス 「基礎看護学実習 I」を通して. 滋賀医科大学看護学ジャーナル, 7(1), 31-34.
- 高橋永子, 平瀬節子, 野村春香(2011). 基礎看護学実習 II で学生が気づいた倫理的場面. インターナショナル Nursing Care Research, 10(2), 29-38.
- 高橋 隆雄(2000). 「反省的均衡」に関する基礎的考察. 文学部論叢, 66, 1-17.
- 竹村多加, 小林淳子(2012). カリキュラム改正後の看護 学生の倫理的感受性に関する実態調査(第一報). 中国四国地区国立病院機構・国立療養所看護研究学会誌, 7, 180-18.
- 竹下美恵子, 佐久間佐織, 小澤香奈恵, 長谷川信子, 木村美智子(2010). 早期体験学習としての基礎看護学実習 I の学び. 愛知きわみ看護短期大学紀要, 6, 71-77.
- 竹内貴子, 中島佳緒里, 巻野雄介, 酒井田由紀, 加藤広美, 高下翔, 野崎邦子, 山田聡子(2020). 基礎看護技術教授内容の検討 基礎看護学実習における技術項目の実施経験の確認から. 日本赤十字豊田看護大学紀要, 15(1), 41-47.
- 坪倉繁美編(2005). 具体的なジレンマから見た看護倫理の基本. 東京: 医学芸術社.
- 塚田みのり, 熊谷真由実, 江藤美佐子, 三田勢津子基(2020). 基礎看護学実習後に行った倫理カンファレンスの一考察, 近畿高等看護専門学校紀要, 18, 31-34.
- 厚生労働省(2019). 看護基礎教育検討会報告書, <https://www.mhlw.go.jp/content/10805000/000557411.pdf> (2021年11月12日閲覧)
- 内田史江, 西岡美作子, 田村美子, 森田なつ子(2010). 基礎看護学実習 II において学生自身がとらえた医療従事者としての持つべき人間性についての自己像. 看護・保健科学研究誌, 10(1), 176-182.
- 山本真弓, 鷺尾昌一, 入部久子(2015). 看護基礎教育における倫理教育の実態調査. 日本看護倫理学会誌, 7(1), 77-85.
- 吉田みどり(2013). 看護倫理 見ているものが違うから起こること. 東京: 医学書院.

Abstract

In this study, the current state of nursing ethics education before and after basic nursing practice was clarified through literature review. For the purpose of review, the 10 targeted documents were analyzed and the details were summarized in a table under the following categories: subjects and research methods, nursing educational methods, descriptions of ethical situations which the students had witnessed, and viewpoints regarding learning support. The similarity between viewpoints regarding learning support was also categorized. An analysis of the documents revealed that, in each case, basic nursing practice itself was regarded as a place for ethics education. The viewpoints which supported ethical learning of the students were categorized as follows: reflection and verbalization; cultivation of ability to solve; and education according to the level of student's ethical learning. Students often face ethical problems in basic nursing practice, and hence it is important to reflect upon them, share them with others, and develop the ability to tackle them. It was found that educational support is required to introduce the perspective of nursing ethics to the nursing students before training and also the ethical issues encountered by them after the training.